

W.S. モームのユーモアについて

野 村 博

1

かつて私は、『サマセット・モームの人生観』という小論で、作品をとおしてみたモームの人生に対する態度を「ユーモアのある諦観へいたる道」と把握し、この視点から、次のように述べた。

「これ（モームの人生観の本質と考えられるもの）を要約してみると、廣大無邊の宇宙からみれば、人間は、何と取るに足らない卑小な存在であろうか。宇宙の塵芥にもすぎないではないか。その人間が無意味ではかない人生を、たがいに束の間の幸福を追い求めるために、矛盾した本性を一見もつともらしい調和の蔭にかくしながら、利己的な自分自身の觀點から人を正・邪に辨别し、その行動を善・悪で判断して生きている。まことに滑稽で馬鹿げているではないか。しかも人の不幸は、ここに胚胎するのだ。無意味ではあるが、一度しかないこの人生を快適に生きていくためには、まず、人間の取るに足らない卑小さを自覺し、そのうえに立つて、複雑な人間の限りない多様性と、道徳的な価値の相對性を認識しなければならない。すなわち、人は、自分の自我を放棄することによって、さまざまな人間のさまざまな行動を判断することを拒否し、そのまま容認しなければならない。いかなる人に對しても、いかなる行動に對しても、すべて、宇宙における人間の塵芥的存在性の立場から憐れみを内に秘めた笑いのなかに寛ろぐヒューマリストとして、寛容の態度をとらなければならない。そして、いっさいのはからいを捨てて、自分に與えられた素材を最高度に活用し、自分の人生模様をできるだけ込み入った美しいものにするために、「今・此處」を穩やかに忍耐力と憐れみ深い同情心をもって、生きなければならない。これを要するに、モームの人生観は、一言でいうと、“Humorous Resignation”（ユーモアのある諦観）、すなわち、寛容と人生繪模様の哲學である。」⁽¹⁾

ところが、たとえば小川和夫氏は、その『Somerset Maugham という人』のなかで、

「最後に、これはあまり人が指摘していないようであるけれども、モームにはヒューマーが欠けている。モームの劇にヒューマーがあると論じた人があるけれども、私はそうは思わない。モームの劇にあらわれている笑いは、機才とかシニシズムとか諷刺とかいろいろに呼べるだろうが、ヒューマーではない。モームには、まじめすぎたために、狭くなっているところがある。モームの寛容というのも、ヒューマーのない寛容であるから、じつに暗い感じのするも

のである。生まれつきであるからしかたがなく、ないものねだりをするのもよろしくないが、少々憐れに感ずることがある。」⁽²⁾

と述べられたことがある。はたして、モームの寛容は、ユーモアのない寛容であって、モームは、シニシズムに終始したのであろうか。

これに反して、Klaus W. Jonas 氏——The Center of Maugham Studies を創設し、その所長でもあるアメリカのピッツバーグ大學教授——は、“The Gentleman from Cap Ferrat” のなかで、「批評家たちがモームに浴びせたあらゆる非難のうちで、シニシズムの非難ほどモームを傷つけたものはなかった。」と言って、

His philosophy of life is that of a humorist who likes nothing more than tolerance.⁽³⁾

と断定している。このようにモームは、寛容のみを愛好するヒューマリストであったのだろうか。

以下、私はこの小論において、従来わが國のモーム論では言及されていなかった二人の、しかもかなり對蹠的なモーム觀を抱いているモーム研究者の著書を検討しながら、いったい、モームには、ユーモアがあるのかないのか、あるとすれば、その性質はどのようなものであるのか、シニシズムとの関係はどうなのか、などについて考えてみたいと思う。

2

M. K. Naik 氏（インドのカルナターク大學講師）は、その“W. Somerset Maugham”において、「モームに浴びせられたシニシズムの非難は、批評家たちがしばしば論じてきたところである」が、「1896年から1965年にわたるモームの全作品」をとおして、「彼のうちにあるシニシズムとヒューマニタリアニズムの二つの氣質間の葛藤相剋」という新しい觀點から、モームに對してアプローチしようとする。⁽⁴⁾

At the center of the Maugham-enigma lies a deep-seated conflict, a conflict between cynicism and humanitarianism, which is discernible in his early work, and the growth and influence of which can be traced through his career to his final achievement.⁽⁵⁾

モームには、シニシズムとヒューマニタリアニズムという二つの氣質ないし傾向が混在し、相互に抵觸し衝突しながら、その消長を示している、という見地に立って、モームの創作活動を年代的に三期に區分して跡づけていく⁽⁶⁾。すなわち、Naik 氏によると、まず、モームの長篇小説と戯曲について、初期では「深い憐れみと柔和さを伴った生まれつきの感受性」が、幼少期の挫折と苦惱に起因するシニシズム——多感な心の持ち主がみずからの鋭敏さに對して行なう防衛反應——を制御していたが、中期になると著しい變化が見られる。つまり、過去の重苦しい亡靈をカタルシスするために書いた“Of Human Bondage”を轉機にして、新たな出

發をした中期は、「モームに特有の技法」が使われる。それは、“a detached, amused, and ironical attitude towards the world and life, in which the author repressed his sympathies and contemplated the spectacle of existence with an indifferent shrug.”⁽⁷⁾ であって、シニシズムが中期を支配している。そして、後期において、「モームは、人生の慰みのある皮肉な観察者の見地と技法を發展させ完成させて、作品中の人物とその行動を外部から超然と見つめるのである。」⁽⁸⁾ しかし、Naik 氏は、さらに付け加えて、次のように論じている。

As for the two strains themselves, Maugham's cynicism was, in this last phase, distinctly tempered by mellowness. But this new mellowness, brought by years, could not, paradoxically enough, produce results similar to those produced by the strong and active sensibility of the early phase, for, it was continually hampered by the confirmed habit of amused indifference cultivated during the middle phase, and was, therefore, not powerful enough to inspire the creative effort required to handle successfully the graver themes at which he now tried his hand.⁽⁹⁾

要するに Naik 氏によると、モームは、初期ではヒューマニタリアニズムの傾向・氣質が濃厚であるが、中期になるとシニシズムの氣味が優勢になり、後期では、それが「柔和な圓滿さ」(mellowness) によって輕減されてはいるけれど、外から距離をおいて人生を超然として遊離的に眺める傍觀者的態度を完成させたのである。

次に、長篇小説と戯曲から眼を轉じてモームの短篇小説を見ると、Naik 氏によれば、「彼の慰みのある觀察と超然性は、扱われるテーマのもっている美とペイソスと人間的な魅力で動搖させられている。」⁽¹⁰⁾ そして、長篇小説や戯曲にも見られる「構成的・技法的な練達さ」に対して、さらに「深い情緒的な暖かさ」が付け加えられているが、初期の作品は、シニカルな面が出て、モーム自身も認めているように駄作である。中期の作品は、モームに特有の技法である「人生に對する超然とした遊離的で皮肉な態度」あるいは「人生の慰みのある皮肉な觀察者の態度」に基づいている。後期になると、モームの acid irony は、長篇小説や戯曲の場合と同じように、柔らげられて good-humored banter になっている。そして、「モームの人間性の見方には、人間の弱さを理解し大目に見ようという願望とともに、柔和な圓滿さがはっきりとある。」⁽¹¹⁾ しかも、この「柔和な圓滿さ」は、「無關心の慰み」という習性によって妨げられていない、というのは、モームの共感の情は、短篇小説の場合には、はるかに活動の自由が與えられているからである。もちろん、短篇小説にも、シニシズムとヒューマニタリアニズムの傾向は存在しているが、しかし、概して短篇小説は、長篇小説や戯曲にくらべてはるかに人生や人間性について公正で釣り合いの取れた人情味のある描寫をしている。おそらくその理由は、「モームが、長篇小説や戯曲を創作する合い間に短篇小説を書いたから、無意識的にシ

ニカルな超然的遊離の態度を休みにしていたためであろう。」そして、Naik 氏によると、

Cynicism and ironic detachment no doubt mark many of the stories, but the number of occasions on which the writer's emotion and sympathy are given free play are more frequent here than in the novels and the plays. It is possible, therefore, that posterity might find Maugham's short stories more appealing than his other works.⁽¹²⁾

以上、モームの全作品をとおして、Naik 氏によると、「モームには明らかにシニカルな傾向があって、この傾向が概して他の氣質より強く彼の作品に影響を及ぼしていることは否定できない。」だから、「モームがたゆまずに培養してきた人生を皮肉な超然さで見つめる遊離した観察者の態度と技法は、暖かさのシニカルな欠乏を多くの作品のなかで助長している。道徳や価値を冷淡な無關心さをもって眺める傾向は、いっさいは空であるという確信から生じているが、これも彼の作品のなかでしばしば現われている。そして、モームの愛に対する態度をもきわめてしばしば色どっているのである。“Of Human Bondage” や “The Summing Up” で述べられている人生哲學においても、それは明らかにされているのである。」⁽¹³⁾ なるほど、「モームは、たびたび『寛容の悦ばしき』(amused tolerance) を口にするが、“A Writer's Notebook” には意味深長な記事がある、すなわち、『寛容とは無關心の別名にすぎない。』——これこそ、しばしばモームのいう寛容の意味にほかならないのである。」⁽¹⁴⁾

Naik 氏によると、「モームの生まれながらのヒューマニタリアンの同情と、彼が故意にその反動として練磨してきた苛酷で冷やかな無關心さとの争いの終局は、概して幸福ではなかった。」⁽¹⁵⁾ そして、

In the prime of his career, Maugham surrendered himself to cynicism. He stifled the humanitarian in himself quite early. He grew a thick skin; he learned to be on his guard against emotion, as well as against life and the world; he learned to be suspicious of the motives of men; he learned not to sympathize with or to blame men, but only to be amused at their foibles; he became a cynically indifferent spectator of life.⁽¹⁶⁾

これを要するに、Naik 氏によると、モームは、「ユーモアのある諦観」へいたったヒューマリストであるどころか、「人生を冷笑的に無關心に眺める傍観者」にほかならないのである。

3

Sven Arnold Jensen 氏(ノルウェーのオスロー大学)は、その“William Somerset Maugham—Some Aspects of the Man and his Work—”において、「モームの作品のなかに現われていて、人生、愛、人間に対する彼の態度の特質を示しているといえる思想や感情の重要な要素を見つけ出して、その要素を目だたせよう」とする。⁽¹⁷⁾

まず、「モームの人生に対する態度」を自叙傳的小説 “Of Human Bondage” の Philip Carey をとおして明らかにしていこうとする。この小説は、當初 “Beauty from Ashes” という書名にしたかったというモームの辯からも示唆されているように、「陰うつで悲慘な状態から忍耐と諦観へ」と Philip が人生を歩んでいく遍歴の描寫である。人生無意味の考えから人生模様の哲學にすすむ philip は、しかし、諦観するようにはなるが、ユーモアを伴ってはいない。「諦観だけでは、不じゅうぶんである。」⁽¹⁸⁾ “The Moon and Sixpence” の Dirk Stroeve, “The Painted Veil” の Walter と Kitty, “Ashenden” の Ashenden などでも、依然として諦観に陰うつな暗さが残っているが、“Cakes and Ale” ではじめて「超然とした慰み」(detached amusement) に讀者は氣づくのである。“The Narrow Corner” の Dr. Saunders にいたって、「おかしみのあるものについての盡きぬ感じ」(an unfailing sense of the ridiculous) によって諦観が獲得される。そして、「彼は自分を外部から眺めることができるし、人生の楽しい喜劇の觀客であると同時に俳優であることができるのである。」⁽¹⁹⁾ Philip は、その人生行脚で最後に人生を受容し超然とするが、ユーモアの感じによって明るいものはされていない。Dr. Saunders をまっけてはじめて、「ユーモアのある諦観」が確立されるにいたるのである。そして、これこそ、モームの人生に対する態度の特質を示すものである、と Jensen 氏は論じる。

次に、「モームの愛に対する態度」について Jensen 氏は、“Of Human Bondage” における Philip の悲劇的な戀愛經驗，“The Moon and Sixpence” における Dirk Stroeve の不幸な愛，“The Painted Veil” における Walter と Kitty との相互に報われない愛情などのように、報われない愛、片思いの苦惱をモームは自己同一視の立場から描いているが、“Cakes and Ale” では、冷靜で超然とした觀察者の立場、「自分の存在にまつわる事件を超越して上に立って、多種多様な模様の本質的な部分として靜かに眺めることができる」立場で、愛の諸相を描いている。⁽²⁰⁾ しかし、モームの愛についての意見を要約してみると、「愛は一般に報われないものである。」ことになるけれども、留意しなければならないのは、モームが愛を性愛 (sexual love) と慈愛 (loving-kindness) に分けていることである。モームが「報われない愛」を愛の姿としている場合の愛は、「純粹で單純な愛」とも呼んでいる性愛についてであって、慈愛に關してモームは、“The Summing Up” のなかで、

Loving-kindness is the better part of goodness. It lends grace to the sterner qualities of which this consists and makes it a little less difficult to practise those minor virtues of self-control and self-restraint, patience, discipline and tolerance, which are the passive and not very exhilarating elements of goodness.⁽²¹⁾ と述べている。すなわち、Jensen 氏によれば、モームにおいては、慈愛は、善良さの一部分をなしている美德を行なうということに對して觸媒の役割りを果たすものである。したがって、慈愛は、性愛のように異性關係にかかわる觀念ではなく、人生と世界に對する態度、つま

り寛容、我慢、忍耐、慈善、親切などによって特徴づけられる態度を示すものである。したがって、慈愛は、Philip Carey の人生受容、Dr. Saunders のユーモアのある諦観、ラリー (“The Razor’s Edge”) の積極的な同情などを包含するものであり、モームは慈愛の理想を唱道している、と Jensen 氏は考えるのである。⁽²²⁾

最後に、「モームの人間に対する態度」においては、Jensen 氏は、内向型の人間 Philip すなわちモームが、内省力、開かれた心、科学的な性向、健全な常識、率直で明せきな直接さ、要するに鋭敏な観察眼をもって、“Of Human Bondage” の Cronshaw や Foinet, “Mr. Know-All” の Max Kelada, “Mackintosh” の Walker などで描いているように、「人間性は、わけのわからない、あてにならない、筋みちのとおりなものであり、人間は、矛盾した要素の束である」ことを、超然と遊離した態度で眺めている。モームの人間に対する態度は、彼のことばでいうと、「寛容の悦ばしさ」(amused tolerance)⁽²³⁾である。そして、この寛容は、Philip が體得した人生模様の哲學のほかに、自分自身の缺點の自覺、ユーモアの感じ、ひとりひとりの個人を尊敬する精神などを、その源泉にして獲得されたものである。したがって、「寛容の悦ばしさ」は、モームにとって生得的なものではなく、“A Writer’s Notebook” の1920年の項に書かれている「無關心の別名にすぎない」寛容から、Philip のユーモアのな忍耐力の寛容を経て達成されたものであって、人生や愛に対する態度と同じように、モームは、ゆるやかな過程においてではあっても、徐々に發展的に圓熟して人生行路の終わりでは、「世界ならびに自分自身と完全に和している」⁽²⁴⁾ように思われるのである。

以上、Jensen 氏によると、作品に現われた限りのモームは、ユーモアのある諦観をもって人生を生き、慈愛を人間の最高の理想として唱道し、矛盾に満ちた人間を眺めては「寛容の悦ばしさ」で超然と笑いのなかに寛ろげる悟得の境に最後的には到達した人ということになるのである。

4

以上で私は、二人のモーム論を眺め終えたが、ここで要約してみると、Naik 氏によれば、モームは、生得的なヒューマニタリアニズム的氣質を、人生と世界に対する冷笑的な無關心(cynical indifference)のまえに放棄してしまったようにみえるし、Jensen 氏によれば、モームは、苦惱と忍耐を経て晩年にはユーモアのある諦観(humorous resignation)へいたったように思われる。両氏の到達した結論は、かなり異なっているけれども、ともにモームを全作品により文筆上の生涯を通じて發展的にとらえようとした點は、軌を一にしているのである。

私も、『サマセット・モームの人生観』で、モームをいわば發展的に見て、次のように述べたことがある。

「1920年、すなわちモームの28歳のとき、彼は『作家の手帳』のなかで、すでに、『ユーモアのある諦めほど、生きていくのに快適な気分は、ほかに想像することができない。』

と喝破している。この『ユーモアのある諦観』は、……モームが何ら苦勞することなく、いわば生得的に所有していた觀念ではなく、鋭敏な觀察力をもった透徹した眼の現實凝視に基づく思索と、『やって來た経験なら何でもこれを受け入れ』て血肉化しようとした意志の努力によって獲得した精神的境地の表現である。作家モームが、彼自身も認めているように“natural writer”（生まれながらの作家）ではなく、“made writer”（作られた作家）であつたのと同様に、人間モームは、決して“natural humorist”（生まれながらのヒューマリスト）ではなく、“made humorist”（作られたヒューマリスト）であつた。Karl G. Pfeiffer の次のことばも、はっきりと、このことを物語っている。

『モームの人格は、改造された人格である。彼は、ある種の人格として生まれ、意志の作用で自分自身を別人にした。神と兩親が行なつた細工に不満を感じて、自分で改善をなしとげた。圓熟したモームは、若いモームの理想であり、あるいは、その理想のほどよい複寫であつて、手近かにある原料から彼が形づくりえた最善の人格である。彼が求めた理想は、完全な姿では、作品のなかの「私」にしか實現されてはいなかつた。しかし、彼は自分自身を改造することに、驚くべきほど成功したのである。』⁽²⁵⁾

『若いころ非常に狹量であつた』モームは、『自分を生け垣で圍んで保護し、日和見をしながら世間の風に追従し妥協する生臭坊主には、まったく情け容赦ができなかつた。』と、みずからも『要約すれば』のなかで言っている。それほどに、若いモームは、『片寄つた自我』の持ち主として、寛容の精神から、ほど遠かつたのである。それにもかかわらず、いや、むしろ、それだからこそ、かえつてモームは、狹量の自我を否定し、ヒューマリストとしての寛容の態度を身につける必要を痛感し、刻苦勉強したにちがいない。醫學校における自然科學の習得や、たびかさなる旅行でのさまざまな経験が、モームをしてヒューマリストにするのに役立ったことは、いうまでもない。モームは、しかし、いずれにしても、意志の力によって、心の偏狹なモラリストから寛容の精神を體得したヒューマリストになつたのである。モラリストからヒューマリストへ。——それが、モームの歩んだ道であつた。』⁽²⁶⁾

モームは、イギリス人でありながらフランスで生まれ、幼少にして兩親と死別し、孤兒になつて伯父のもとで育てられ、背が低く吃音で、不幸な幼少年時代を送つたために、たしかに、人に倍して孤獨であつたのだろう。幼いころの欲求不満、苦惱、孤獨は、モームを多感にし、多感なるがゆえに防衛機制として冷笑的にするとともに、孤獨がモームをして人を戀うるヒューマニタリアニズム的氣質を醸成したといえるだろう。Naik 氏の言うシニシズムとヒューマニタリアニズムとは、いわば多感な孤獨の同根異花にほかならない。しかし、モームは、Jensen 氏がモームの作品をとおして發展の過程を述べているように、また Pfeiffer 氏が指摘しているとおり、神と兩親によって與えられた自分を否定して、理想の自我になるように歩一歩と自己改造を試みたのである。

もしシニシズムが、「人間の動機や行動の誠實さ・善良さを否定し嘲笑する性癖」⁽²⁷⁾である

ならば、この意味におけるシニシズムに、モームが終始したとは、彼のどの作品からも決して言えないだろう。人生の馬鹿らしさ、おかしさに直面しながら、これを決して憎むことなく、距離をおいて憐れみの情をもって眺める心が、ユーモアであるとすれば、まさにモームは、ヒューマリストにほかならない。ユーモアとは、「おかしみや慰みのある物や事を感じしたり、表現したりする能力」⁽²⁸⁾であり、人生の不合理を好意的に眺める性情であるとすれば、まさにモームは、その一人の典型ではないだろうか。

にもかかわらず、シニシズムの非難がモームに對し浴びせられることが多い。これに對して、モーム自身、“The Summing Up”のなかで、

I have been called cynial. I have been accused of making men out worse than they are. I do not think I have done this. All I have done is to bring into prominence certain traits that many writers shut their eyes to.⁽²⁹⁾

と言っている。たしかに、モームは、人間を惡しざまに書いているとは思えない。人間性のもつ矛盾、人生の不合理さ、はかなさを、一種の哀感をもって描寫しているのである。だから、そこに虚無的な雰囲気漂っていることは否めない事實であるが、ニヒリズムは決してシニシズムではない。モームのニヒリズムは、しかも、上田勤氏も述べられたように、ロマンティシズムと不思議に結合しているのだ。『ニヒリズムを根底にしたロマンティシズム。』『人生を突き放していながら、人生に愛着を失わない態度。』⁽³⁰⁾ 人生のはかなさ、我執のあわれさ、人間的存在の有限・相對なるがゆえの謙讓さの必要を、そのおびたしい作品で描いているのである。まさに、「モームの作品は、彼の人間性に裏打ちされた人間の書であり、限りなく生きる喜びを與えるもの」⁽³¹⁾ではなかろうか。モームは、ユーモアについて、次のような定義的説明を與えている。

Humour teaches tolerance, and the humorist with a smile and perhaps a sigh, is more likely to shrug his shoulders than to condemn. He does not moralize, he is content to understand, and it is true that to understand is to forgive and pity.⁽³²⁾

すなわち、ユーモアとは、モームにおいて、物事に善惡の別をつけて人に道を説くこととはまったく對蹠的に、人の過失をとがめず廣く人を受け入れる寛容の精神であり、人生のかなしさ・おかしさを理解し、すべて「笑って許す」ことである。モームの作品は、いずれも、この意味のユーモアで貫かれているといえよう。

5

私は、ここで、モームのユーモア——「ユーモアのある諦觀」——を明らかにするために彼の短篇中の短篇“Salvatore”——Naik氏のいう後期に屬する“Cosmopolitan”のなかの一つであるが——を取り上げて、少し考察してみよう。

この“Salvatore”については、すでに Jensen 氏が、モームにとって最も完全で美しい人生模様と考えられているもの、すなわち『人が生まれ、大人になり、結婚して子どもをつくり、パンのために苦勞し、そして死んだ』という模様の例證であるとともに、彼の唱道する慈愛の理想の一つの例示でもあると指摘しているとおりに⁽³³⁾、そしてまた、この題名“Salvatore”（⇐Salvation 救い）がいみじくも示しているように、おそらく諸法實相を達觀して生きる人間のありのままの生活を如實に描寫しているモームの理想の世界ではなかろうか。この1800語たらずの平凡な物語りでモームは、單純率直で混じりつけのない謙虚で慈愛の精神に満ち満ちた一人の若者のポートレートを讀者に提示しているのである。

“Salvatore”は、“I wonder if I can do it.”ということばで始まり、そして、次のような意味深長な一節で終わっている。

I started by saying that I wondered if I could do it and now I must tell you what it is that I have tried to do. I wanted to see whether I could hold your attention for a few pages while I drew for you the portrait of a man, just an ordinary fisherman who possessed nothing in the world except a quality which is the rarest, the most precious and the loveliest that anyone can have. Heaven only knows why he should so strangely and unexpectedly have possessed it. All I know is that it shone in him with a radiance that, if it had not been so unconscious and so humble, would have been to the common run of men hardly bearable. And in case you have not guessed what the quality was, I will tell you. Goodness, just goodness.⁽³⁴⁾

モームは、善良さ、すなわち慈愛によってはじめて、人間世界のみじめさから救われるということを示唆しようとしているのではなかろうか。モームの理想の人間像が、ここにあるように思われるのである。

ところで、この“Salvatore”の物語りの筋を要約してみると、――

ささやかなブドウ園を所有しているイタリアの一介の漁師の子であるサルヴァトーレは、第二人の面倒をみて父親の仕事を手助けていたが、美しい娘――「森の泉のような眼をし、ローマ皇帝の息女のように振るまった」娘を戀するようになり、二人は婚約する。が、彼が軍務を終えるまでは結婚できない。イタリアの海軍に入隊して、はじめて故郷の島をあとにしたとき、彼の腦裡をいつも去來するのは、日没時にはお伽の國の島のように浮かぶイスキア島、夜明けには眞珠のように光ってそびえるヴェスヴィアス山、それに婚約した美しい娘のことであった。スペチア、ヴェニス、バリ、中國と、あちらこちらに派遣されているうちに、幸か不幸か、彼はリウマチにかかり、除隊だと決まったときには、有頂天になって喜んだ。不治の病氣だと醫者にきかされても、そんなことばに耳を傾けもせず、喜び勇んで歸國した。しかし、埠頭に出迎えに来てくれた人々のなかに、婚約した娘の姿を探したが見當たらな。サルヴァト

ーレが不治の病氣にかかったのを理由に、娘の父親から婚約が取り消されていたのである。娘の家まで行き、母親と娘に出會ったが、取りつく島もない。サルヴァトーレは、おそろしく惨めであったが、娘を責めはしなかった。日常の仕事に専念し、すべてを忘れようとしていた数か月後のある日、母がアスンタという不器量な娘が、彼と結婚したがっていることを話した。村の教會のミサに出かけて、そのアスンタを見てから、サルヴァトーレは、母に結婚してもよいと告げた。結婚した二人は、ブドウ園のまん中に建てられた小さな白塗りの家に落ちついた。アスンタは、容姿こそ美しくないが、心の善良な働き者であった。サルヴァトーレは、海にブドウ園に刻苦精勵したが、リウマチがおこると、二人の男の子の子守りがてらに海岸で一日を送るのであった。仕事で荒れた大きな手であったが、子どもたちに海水浴をさせるときに支えてやったり、細心の注意で水を拭いにとってやったりするのを見ていると、その手がまるで花のようであった。また、その手の平に裸の赤ん坊をのせて高く差しあげ、赤ん坊の小ささを笑う彼の笑いは、まるで天使の笑いのようであった。そういうときのサルヴァトーレの眼は、子供のようにあどけなかった。

以上が“Salvatore”のあら筋であるが、イタリアの一介の漁師サルヴァトーレに光り輝くもの、それは天真らんまんな自然の善良さにほかならない。この善良さこそ、モームが胸に抱いている理想であり、救いであり、悟りではなからうか。「ユーモアのある諦観」は、この境地で極まるのではないか。阿々大笑の笑いではなく、静かな笑い、暖かい微笑を誘うのが、モームのユーモアであろう。

Naik 氏でさえ、この“Salvatore”について、「夫婦間の移り氣を記録し、あらゆる動機を疑う超然とした観察者であるモームが、今や善良さ、『ただの善良さ』に感知するようになったのである。」⁽³⁵⁾と述べているが、Naik 氏こそ、モームに對し冷酷な見方をしてきたのではなからうか。それはともかく、“Salvatore”は、モームの抱懷した理想の人生模様であることは疑いないであろう。人生の酸いも甘いも味わった大人の文學である。

6

さて、“Salvatore”がモームの理想の人生模様であるとして、そして、モームがそれに向かって努力をし自己改造を目ざしてきたとしても、いったい實際の人間モームの實像はどうであったらうか。作品をとおして作品にあらわれた限りのモームと、現實のモームの姿とは、どれほど距離があったらうか。さきに引用した Karl G. Pfeiffer の「彼が求めた理想は、完全な姿では、作品のなかの『私』にしか實現されてはいなかった。」ということばは、大いに氣にかかるのである。そして、事實、最近出版されたモームの甥である Robin Maugham の“Somerset and all the Maughams”によると、人間モームの秘められた一面が如實に鋭く描かれている。

「私は“Of Human Bondage”を耐えがたい憑きものから解放されるために書いた。過去

の亡霊がすべて出ないようにしたかったが、私はそれに成功した。」と言うモームに対して、「しかし彼は成功したのだろうか。私はそうは思わない。」⁽³⁶⁾と考える Robin Maugham は、モームの晩年について、「もしウィリー〔モーム〕の晩年にアラン〔モームの秘書〕の絶えざる注意と献身がなかったなら、私の伯父は發狂するか自殺するかのどちらかであっただろう、と私は正直に信じる。」⁽³⁷⁾と述べている。そして、Robin Maugham は、

「ウィリーの晩年には、たしかに、人間性の缺陷をおだやかに受け入れる気持ちだが、彼の性格の表面を靜かにしてはいたが、しかし、この慈悲深さの下には、ときどき爆發する憎惡の火がくすぶっていた。ウィリーは、忘れることも許すこともしなかったのである。」⁽³⁸⁾

「九十歳の誕生日から以後、ウィリーの機嫌は、いっそうはげしくなり、そして何かにいっそう責めさいなまれているかのように見えた。居間の一隅に怒ってぶつぶつ不平を言いながら坐っていることがよくあったし、また、家へ招待した少數の客の誰かれに對しても突然腹を立てがちであった。ときどき彼の顔は惡意でゆがめられ、小さな眼は憎惡で輝き、卑わいなことばを早口で言ったりした。それから、その發作が去ってしまうと、彼は顔を両手にうずめて、自分はおそろしいほど悪い奴だとうめくこともよくあった。」⁽³⁹⁾

そして、モーム愛好者にとっては、あらずもがなの、この書を、Robin Maugham は、次のような所信を述べることによって、結んでいるのである。

「ウィリーは、1965年12月16日に死んだ。振りかえてみると、私は、ときどき彼がこわかったけれど、彼が好きであったことを認める。しかし、決して彼を理解しなかったのではないかと思う。彼の友人のなかでも、彼の青春時代のみじめさが原因となっている病的な内氣さの層を看破した人は、きわめて少ない。彼のほんとうの性格をちらりと見た人は、ほとんどいないだろう。

彼の長篇小説のなかで最もすばらしい1930年出版の“Cakes and Ale”のなかで、ウィリーは、世界的に有名な老作家『エドワード・ドリフィールド』について、次のように書いている。

『死ぬまで人に知られることなく孤獨であったエドワード・ドリフィールドというほんとうの人間は、その作品の著者と、その人生を送った人間との間にあって、人には見られることもなく靜かに道を歩んだ幽靈であって、世間がエドワード・ドリフィールドだと考えていた二つの操り人形を皮肉に超然として笑っているのではないか、という印象を私はもった。』

この引用文のなかの『エドワード・ドリフィールド』に對して、『トマス・ハーディ』の名前をおきかえてきた人々が多い。しかし、私は、實はそれこそウィリアム・サマセット・モームの眞の描寫である、と確信するのである。」⁽⁴⁰⁾

以上のような Robin Maugham による人間モームの傳記的事實が、モームの現實の姿であるとすれば、モームのいわゆる實像と虚像の間には、かなりの距離があるといわなければならない。

モームは、小説の目的は、教えることではなく楽しませることであって、文學はすべて現實

からの逃避であると言ひ⁽⁴¹⁾、また、自分には教育的な天性もなければ、人にもものを教えようとも思わないと述べているけれど⁽⁴²⁾、その作品をとおして私たちが勝手にモームから教えられたと思う「ユーモアのある諦観」も、實は、モームその人が、「終始一貫性のない、でたらめな性質の束」⁽⁴³⁾で「あてにならない」⁽⁴⁴⁾「矛盾の塊」⁽⁴⁵⁾である人間、「自分の行爲を他人にする説教に合わせることは、他人にする説教を自分の行爲に合わせるのとまったく同じように、むずかしい。たいいてい人は、その行なうことと説くこととが違ふ。」⁽⁴⁶⁾言行不一致の矛盾した人間の、その一人であることを示している證左にすぎないのであろうか。

しかし、それにしても、モームのいうユーモア、ユーモアのある諦観は、煩惱具足の凡夫であり罪惡深重の人間であるわれわれにとって、夢寐にも忘れてならない人生の知恵ではなからうか。

注

- (1) 拙著「人間性と倫理」(昭和45年、光彩社刊)の一章「サマセット・モームの人生觀」p. 49
- (2) 研究社刊「英語研究」1959年11月號
- (3) Klaus W. Jonas: The World of Somerset Maugham, 1959, Peter Owen Limited, pp. 35-36
- (4) M. K. Naik: W. Somerset Maugham, 1966, University of Oklahoma Press, p. vii
- (5) Ibid, p. 3
- (6) Ibid, p. 28
- (7) Ibid, p. 58
- (8) Ibid, p. 106
- (9) Ibid, p. 106
- (10) Ibid, p. 108
- (11) Ibid, p. 119
- (12) Ibid, p. 126
- (13) Ibid, p. 181
- (14) Ibid, p. 183
- (15) Ibid, p. 185
- (16) Ibid, p. 187
- (17) Sven Arnold Jensen: William Somerset Maugham.....Some Aspects of the Man and his Work.....1957, Oslo University Press, p. 1
- (18) Ibid, p. 18
- (19) Ibid, p. 18
- (20) Ibid, p. 35
- (21) W. S. Maugham: The Summing Up, Heinemann, pp. 302-303
- (22) S. A. Jensen: Ibid, p. 52 & p. 54
- (23) Ibid, p. 73
- (24) Ibid, p. 81
- (25) Karl G. Pfeiffer: W. Somerset Maugham.....A Candid Portrait, 1959, W. W. Norton & Company, p. 102
- (26) 拙論「サマセット・モームの人生觀」pp. 50~51

- ②7 & ②8 S. O. D.
- ②9 W. S. Maugham: The Summing Up, p. 55
- ③0 上田勤「現代英文学とモーム」(英宝社刊, 中野好夫編「モーム研究」) p. 34 & p. 38
- ③1 田中睦夫「わがモーム」(垂水書房刊) p. 19
- ③2 W. S. Maugham: The Summing Up, p. 66
- ③3 S. A. Jensen: Ibid, p. 15 & p. 55
- ③4 W. S. Maugham: Salvatore, The Complete Short Stories, Vol. III, Heinemann, p. 1297
- ③5 M. K. Naik: Ibid, p. 120
- ③6 Robin Maugham: Somerset and all the Maughams, 1966, Longmans・Heinemann, p. 117
- ③7 Ibid, p. 195
- ③8 Ibid, p. 208
- ③9 Ibid, p. 212
- ④0 Ibid, p. 213
- ④1 W. S. Maugham: The Writer's Point of View, 1951, Published for the National Book League by the Cambridge University Press, pp. 7-13
- ④2 W. S. Maugham: The Summing Up, p. 11
- ④3 W. S. Maugham: A Friend in Need, The Complete Short Stories, Vol. II, Heinemann, p. 961
- ④4 W. S. Maugham: The Moon and Sixpence, Heinemann, p. 26
 〃 : The Painted Veil, Heinemann, p. 203
- ④5 W. S. Maugham: Of Human Bondage, Heinemann, p. 351
- ④6 W. S. Maugham: A Writer's Notebook, Heinemann, p. 19